

集会宣言(案)

第二次世界大戦の終結から 80 年が経過しました。国際連盟にかわり国際連合が設立され、そこでは世界人権宣言に謳われた理念と同時に、自由権規約委員会をはじめ、女性、子ども、障害者、人種などに対する様々な差別について、解消されるための委員会が設置されました。多くの国々が条約を批准し、日本もまたその例外ではありません。

しかし、国連安全保障理事会を担う常任理事国は、イギリス、フランス、中国、ロシア（旧ソ連）、アメリカなど、戦勝国である連合軍陣営により担われつつも、これら大国の足並みが揃うことは少なく、その後世界大戦には至らずとも、人類にとって常に不安定な状況をつくりだしてきました。さらに今年も、中心国である米国で、国連のルールや理念を否定するような発言をする大統領が就任し、これまで培ってきた、協調の努力が覆されかねないと心配されます。

日本では、長い歴史の中で、人の数に入らない人として、また社会の汚濁を政策的に負わされる人として、社会外の身分に置かれた人々が存在しました。現在の部落差別に通じるそれらのルーツは、しかし一方で、牛馬の死体処理のみならず、寺や神社の清め、芸能、庭造り、木こり、運送、漁労、などなど多くの役割を担いながら、社会においてなくてはならない人々でもありました。蔑視の対象でありながら恐れられ、畏怖の対象でもあったそれらの人々を排除してきたその意識は、今も解消されたとはいえません。人をそのように分け隔て見る視線は、いつの時代にも繰り返し現れ、利用されてきたのです。

人を人として見なさないその姿勢は、現在でも、ロシアによるウクライナへの侵攻、イスラエルによるパレスチナガザ地区への壊滅的な攻撃などに貫かれています。

しかし、まさにそのような視線。人類として共存すべき私たちが、他者をモノのように扱うその態度こそが、第二次世界大戦後の最も大きな反省点でありました。

私たちは今、多くの情報を手に入れることができます。そのため判断が難しく、時には正確ではない情報に惑わされもします。しかしだからこそ、様々な文化や、過ちを含め築き上げてきた国々の歴史を、いろいろな角度から見て、いろいろな声を聴いて、考えて、理解しようとする事は、これまでになく大切です。そのことによって、互いの共感を得ることができるならば、それはまた、何よりの喜びとなるでしょう。

私たちは、共生・協働の社会創造に向け、これからも歩みを続けていきます。

2025 年 3 月 1 日

第 56 回人権交流京都市研究集会 参加者一同